

小学校教科「外国語」における文字指導とコミュニケーション能力の育成をめざした指導と評価の在り方

～デジタルコンテンツを用いて～

教科「外国語」、 「文字指導」、 ICTの活用

直島町立直島小学校

〒761-3110
香川県香川郡直島町1600番地

<http://www.niji.or.jp/school/naoshie03/>

1. 研究の背景

本校は、平成6年度から全学年で週1時間、学級担任とALTで、音声を中心とした英語活動に取り組んできた。継続実践する中で、高学年の学習意欲が低下するという課題があり、平成14年度からは、第6学年では、中学校英語科教員とALT、担任で指導し、アルファベットを読んだり書いたりする学習とともに、音声と文字をつなぐ学習を取り入れてきた。6年生の学習意欲は高まり、文字の自然な定着も見られた。しかし、中学校入学後の1年生の英語学習に関するアンケートによると、英語学習の難しさは文字に関することが多く、音声と文字をつなぐ系統的な文字指導が課題であった。平成23～25年度までの3年間、文部科学省研究開発学校として、小中連携を図りながら小学校3～6年生で教科「外国語」の研究に取り組んできた。平成24年度から、文字導入の試案を作成し、それに沿って段階的に文字に触れる活動を試みた。その結果、児童は、実践した活動に対して大きな抵抗感なく取り組んだ。第3学年から、文字を読んだり書いたりすることに親しみ、音声と文字をつなぐ音韻認識が少しずつ育っていく様子が見られた。高学年になって、ある程度の量の英文を使って紹介したり、演じたりする学習経験から文字の必要感が高まった。従来から電子黒板で文字を提示したりしてきたが、児童が文字学習に興味をもって取り組むためには、電子黒板やタブレット等を効果的に活用することが有効であろうと考えた。また、文字を習得したり、他者とコミュニケーションを行ったりする上で大きな手立てとなると考え、研究を行うこととした。

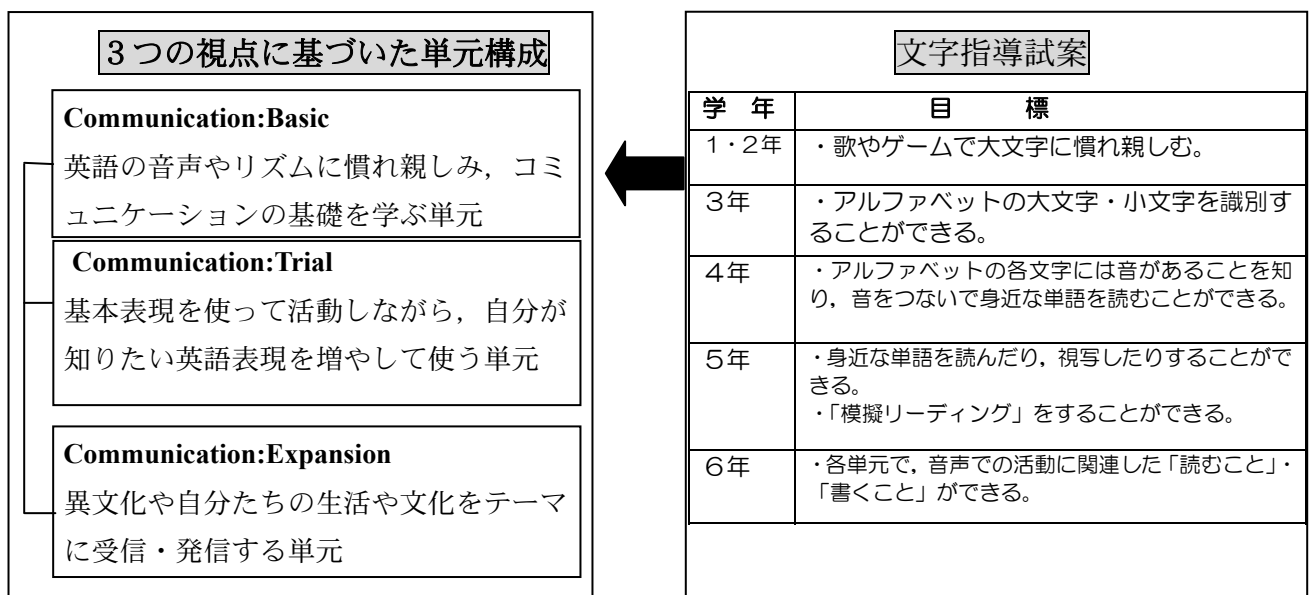
2. 研究の目的

平成27年度から教育課程特例校として、第1・2学年は英語活動を、第3学年から教科「外国語」として開始する。電子黒板やタブレットを用いた文字指導やコミュニケーション能力の育成をめざした授業づくりに取り組む。教師主体で一斉に電子黒板を使った文字指導を行ったり、タブレット等を活用して、個別学習によるアルファベットの文字学習や音韻認識を高める指導、また、グループにより、音声で学んだ表現を文字で確認しながら読んだりする活動などを取り入れながら、小学校段階での文字指導の在り方を研究する。また、普段の英語学習の場だけではなく、Meet the World等で外国人に対して、アート紹介を行う際に、発音指導や内容を聞き手に伝える学習時にタブレットを活用するなど、英語を使ってプレゼンテーションする学習を通して、コミュニケーション能力をより高めていくものと考えた。

3. 研究の方法

「直島小中学校外国語学習指導指針」に基づき、小学校第1・2学年は英語活動（学校裁量の時間）、第3～6学年で教科「外国語」を行っている。発達段階に沿った系統的な文字指導の在り方の研究を推進するために、まず単元構成の方法を3つに分けた。

Communication : Basic では、英語の音声やリズムに慣れ親しみ、コミュニケーションの基礎を学ぶように単元を構成した。身近な題材で、基本的な表現や関連する語彙を、活動を工夫して楽しく練習したり、ペアでの対話を通して会話の仕方を学んだりする。基本的な文字学習も **Basic** で行う。**Communication : Trial** では、課題に向かって、児童の内発的な表現意欲を生かして単元を構成する。設定した場面の中で、基本表現を使って活動しながら、自分が知りたい表現を増やし、使いながら身に付けていく。単元によっては、異学年交流を取り入れる。**Communication : Expansion** では、「地域発信型単元」を中心に、「総合的な学習の時間」での「ふるさと学習」を生かして、実際に英語を使って交流する体験的な学習を行う。年1回、**Meet the World** で、ALT との交流や直島のアート作品を紹介する活動も行う。このような3つの視点に基づいた単元構成の中、**Communication : Basic** において、「読むこと」「書くこと」につながる系統的な文字指導の試案を立てて、指導することとした。また、第3～5学年では、6月に各学年の課題に沿った文字に関する単元を実施し、その後は帯学習で理解と定着を図るとともに、児童の必要感に応じた文字を取り入れた。



(1) 文字指導の計画

児童の実態を把握し、「読むこと」「書くこと」につながる系統的な文字指導の試案を立案する。第3～6学年の6月の文字に関する単元や帯活動での指導について指導計画を作成し、実践する。

(2) 電子黒板やタブレットを活用した授業開発, English Time (5校時前の5分間)での活用

授業の一斉学習で、電子黒板を活用する。児童主体で、個別学習やグループ学習で取り組む場合は、タブレットを使って学習する。また、English Time では、個別にアルファベット文字の学習や会話で言えるようになった英文を音読すること、Meet the Worldでのアート紹介に向けて、グループでプレゼンテーション力を高められるように活用した。年間6回研究授業を行い、ICTを活用した研修を深めた。

(3)意識調査、客観的な調査（児童英検等）より、成果や課題を明確にする。

7月と12月に児童に意識調査をし、英語学習への意欲を考察した。10月に第3～6学年を対象に児童英検を行い、客観的な英語力を測った。第3・4学年は児童英検 BRONZE, 第5・6学年, 児童英検 SILVER を受験した。Meet the World 後に保護者や ALT にアンケートを実施し、効果を検証する。また、教員にアンケートをとり、研究意欲や英語指導力等の向上を検証する。

4. 研究の内容・経過

(1) 研究の経過

平成 27 年度から教育課程特例校として、文字指導の在り方について研究を開始した。そこで、パナソニック教育財団の助成金を得て、予算の範囲内で2名に1台のタブレットが使えるよう、11台購入した。夏季休業中にタブレット研修を行い、全教員がタブレットを使用できるようにした。

電子黒板やタブレット等を活用した公開授業は以下の通り行った。

○公開授業等

- ① 5月20日（水） 2年 英語活動 「いくつあるの？」
 - ・電子黒板を利用した授業実践
- ② 6月25日（木） 4年 外国語 「音の足し算」
 - ・デジタルコンテンツを開発した文字指導
- ③ 9月17日（木） 5年 外国語 「行ってみたい国」
 - ・コミュニケーションの評価について
 - ・ファーラー小との交流
- ④ 10月7日（水） 6年 外国語 「アド街ック in 直島」
 - ・Meet the World に向けたアート紹介について
 - ・タブレットを活用したプレゼンテーションについて
- ⑤ 11月5日（木） 1年 英語活動 「かぞく」
 - ・電子黒板の活用
- ⑥ 1月21日（木） 3年 外国語 「教科」
 - ・コミュニケーション実技について
 - ・ファーラー小との交流
- ⑦ Meet the World 11月28日（土）
 - ・県内外の ALT 25名を招いて英語で交流, アート紹介

(2) 実践事例

① デジタルコンテンツの開発

これまで作成したデジタルコンテンツを修正, 改善するとともに, 新たな教材を開発した。1つは, フォニックスについての学習である。電子黒板で一斉に大文字・小文字を練習した後, タブレットを見ながら音声と文字を確認し, 発音練習できるように, アルファベットジングルや直島にちなんだアルファベットジングルを作成した。また, 3文字からなる英単語クイズを作ったり, フラッシュカードの



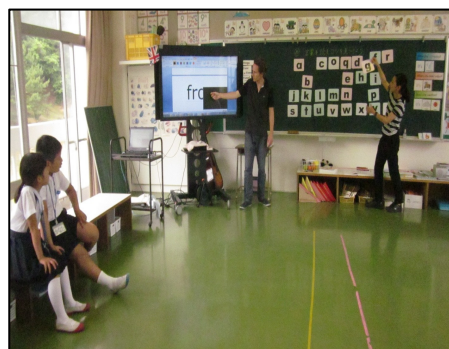
資料1：電子黒板を使って、アルファベットジングルによる発音練習をしている場面

ように英単語をフラッシュさせるような教材を作成したりした。

また、もう一つは、プレゼンテーション力向上をねらった教材である。Meet the World でのアート紹介では、児童がグループごとに作成した紹介文を、ALT がモデルとして読む音声を取り入れた教材を作成した。児童がリズムやイントネーションに気を付けて、英語らしく表現できるようタブレットを活用した。

② 電子黒板を活用した授業研究（4年「音の足し算」）

第3～5学年では、6月に各学年の課題に沿った文字に関する単元を実施した。第4学年で、音と文字とのルールを学ぶ。音と文字をつなぐ単元で、文字には名前と音があるという理解を深め、3文字程度の単語について音を足して読むことについて学んだ。音をつないで、身近な単語を読んだり、音を聞いてアルファベットを選び、単語を作るゲームをしたりした。また、四線上に正しく書くことを意識しながら単語を書く練習もした。授業後、電子黒板を使った、より効果的なアルファベット文字の提示の仕方や教材作成の工夫について議論することができた。



資料2 文字を見ながら、音を足し単語を読んでいる場面

③ English Time でのタブレット活用

文字習得は個人差が大きく、習得に時間がかかる。5校時前の5分間でEnglish Timeの中で、6月と12月を文字学習の時間としている。その中で、タブレットにアルファベットジングルのコンテンツを保存し、繰り返し練習できるようにした。個人差に応じて、楽しみながら何度も練習できるので、児童から好評であった。自分のペースで意欲的に学習に取り組んでいた。



資料3 English Time でのタブレットを使っての文字学習の様子

④ アート紹介に向けたプレゼンテーション練習でのタブレット活用（第5・6学年）

毎年11月末に、県内外のALT25名を迎えて、Meet the Worldという英語で交流する行事がある。午後からは、中学生とチームになり、直島のアート作品を英語で紹介する活動を行っている。毎年、児童がアートの紹介文を作成するが、長い英文を覚えたり、英語らしく表現したりすることに課題があった。そこで、グループで紹介文を作成したのち、本校のALTのモデルとなる音声を入れてデジタルコンテンツを作成した。児童は、グループでタブレットの画面を見ながら、リズムやイントネーションに気を付けて、より英語らしく表現できるようになった。本番でも、ALTに動作やジェスチャーを交えながら、上手にアート紹介をすることができた。このように、英語表現やコミュニケーションの幅が広がり、外国人との実際のコミュニケーションにおいても充実感や達成感を感じていた。



資料4 グループで、アートの紹介文を練習している様子

⑤ インターネット回線を利用したスカイプによるオーストラリアのファーラー小学校との交流

今年度第3～6学年で、オーストラリアで日本語を学習している小学生と交流の機会をもつことができた。実際に、外国語で学習していた内容をもとに、インターネット回線を利用したスカイプを活用して電子黒板に映るオーストラリアの小学生を見ながら、授業で習った表現を使って、上手にやりとりできたことは、英語で、「できた」「伝わった」喜びを感じる機会となった。



資料5 五郎丸選手を知っているかを伝えようとしている様子

じゃんけんゲーム、自己紹介、行ってみたい国、好きな教科について、お互いに伝え合った。また、質問タイムでは、ファーラー小学校の児童は、日本語を勉強しているので、お互いが英語や日本語を使って質問し合った。どちらの学校の児童もとても反応がよく、終始楽しく交流することができた。同年代の子供同士が交流することで、お互いの文化や学校生活についての違いを知り、なお一層英語でコミュニケーションすることへの意欲につながった。

5. 研究の成果

(1) 児童の意識調査から、文字学習への意欲は高まるとともに、コミュニケーション能力の向上につながった。

児童の意識調査では、児童の英語学習への肯定感は、94.8%と高い結果であった。「文字があるほうが分かりやすいですか」という質問では、特に第5・6学年は文字を扱うことに肯定的であった。児童の様子からも、各学年に設定した文字指導の試案は、おおよそ妥当なものだったと言える。

Meet the World では、97.2%の児童がALTと楽しく交流し、全ての児童が「勉強してきた英語を使うことができた。」と振り返っている。また、参加した86.2%の保護者が、「友だちやALTと積極的にコミュニケーションを図ろうとしていた。」と答えたり、97.0%の保護者が「児童の英語の力がついていいる。」と回答したりしていた。参加したALTからも、アート紹介では、「英語で積極的にコミュニケーションしようとする姿勢がすばらしい。直島にある現代アート作品や家プロジェクト作品についてとてもよく分かった。」などとの回答が得られた。

(2) アルファベットの音を捉えることが、音声と文字をつなぐ力につながっている。

客観的調査からみて、文字学習をすることで、児童は少しずつ文字に親しみ、音声と文字をつなぐ力が育っている。「3つの単語を聞いて、共通する最初の文字を書く調査」では、音声と文字をつなぐ学習をしている4年生から、正答率が高くなっており、音韻認識の力が育ってきていることが分かる。本校は単学級であり、1学年が15～22名と児童数も少

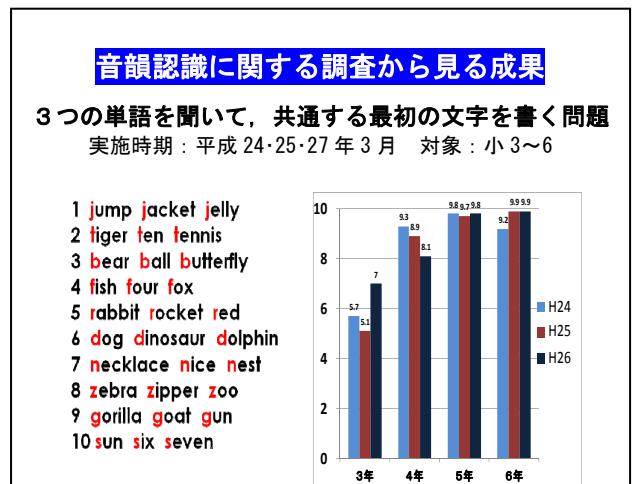


図1 音韻認識に関する調査

なく集団による学力差はある。しかし、文字指導の試案に沿って指導し、ICT等の活用により、音声と文字をつなぐ力が育ち、音声で聞いた単語や文を選ぶ力もついてきたと言える。

(3) 児童英検における文字分野での平均正答率は全国平均より高く、英語を理解する力がついている。

毎年10月に受験している児童英検 Bronze(3・4年)・SILVER(5・6年)の結果では、全体的に平均正答率は全国平均を上回っている。特に、SILVERの「文字」分野の平均正答率においては顕著であり、文字学習の効果が表れている。

また、平成19年、平成23年、25年、27年のSILVERにおける6年生の素点分布を比べてみると、全体的な平均得点の上昇とともに、次第に個々の得点のばらつきが減少している。文字指導を続けることによって、全員に基礎的・基本的事項が定着し、英語を理解する力がついてきていると言える。

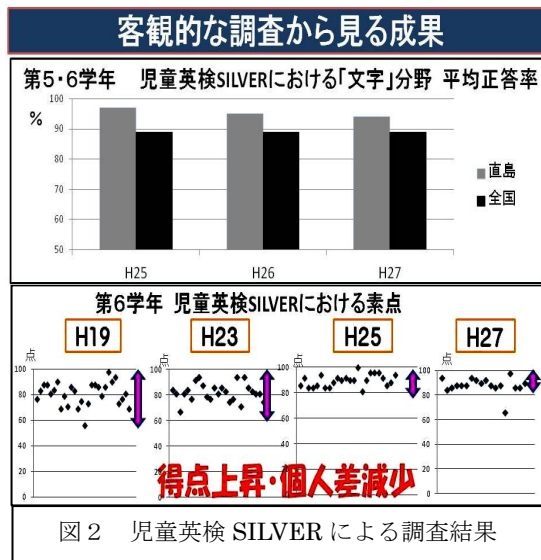


図2 児童英検 SILVER による調査結果

(4) 教員への効果—定期的な研修が指導法の共通理解や教員の研究意欲につながった。

理論研修や指導法研修のねらいを明確にして取り組んだことで、児童の実態に沿った各単元を構成する力が高まった。指導方法について共通理解し、各学年1回、研究授業を行うことで指導力向上に努めた。理論研修では、発達段階に応じた系統的な文字指導について研修し、6月には文字指導についての研究授業を行うことで、文字指導の試案に沿って共通理解を深めることができた。また、授業設計力や児童の評価の見取り方についても、研究授業前のPre研修や研究授業で理解を深めることができた。12月の「香川の教育づくり」発表会では、全員一人一役を担い、「文字指導の在り方」について発表し、教員間の連携強化につながり、研究組織体制の活性化が図れた。夏季研修中のICT機器やタブレット研修は、楽しみながら、実際の授業についてどう活用していくかについて学ぶことができた。

教員アンケートでは、全員が「文字指導の目標や内容について、だいたいのイメージがもてた。」と回答し、89.0%の教員が、外国語の指導が楽しいと感じている。また、ICT研修も含めた外国語指導についての研修では、全員が「学びを深めることができた。」と回答している。

6. 今後の課題・展望

- (1) 小学校段階で、アルファベットを使って、音と文字をつなぐ力を育てること、小文字を使って活動することに慣れておくことが「読むこと」「書くこと」の素地になる。文字を扱うことには時間がかかり、個人差の拡大も予想されるので、スモールステップで丁寧な指導を継続的に行うことが必要である。
- (2) 音声と文字をつなぐための教材の工夫が必要である。さらに、デジタルコンテンツによる教材開発を行い、English Time等で、タブレット等による文字学習で活用していきたい。また、今年度活用した英文

の文字を見ながら、英語で表現する場面での活用については、さらに機会を増やしていきたい。

(3) 小学校において、外国語の免許をもっていない教員が多く、教員研修は不可欠である。指導者が年間計画のもと共通理解を図り、指導内容や指導方法を工夫していくことが大切になる。

7. おわりに

文字指導は、ICT がなければできないということではない。しかし、様々な効果をもつ ICT 機器を使うことで、児童の目は輝き、意欲をもって学習に取り組むことができる。「一斉学習」での電子黒板でのアルファベット文字の提示、「個別学習」または「グループ学習」でのタブレット使用により、指導方法の多様化・効率化を図ることができた。また、県内外の ALT を招いての Meet the World はもちろん、インターネット回線を利用して、スカイプによるオーストラリアのファーラー小学校とのリアルタイムの交流授業では、同年代の児童と交流し、グローバルな視野をもつ可能性を広げられたことは、今年度の大きな成果である。来年度は、さらにデジタルコンテンツを開発し、ICT 機器を活用の場を広げ、児童の英語でのコミュニケーション能力を一層高めていきたい。

< 参考文献 >

- ・直島町立直島小学校・中学校編（2014）『平成 25 年度研究開発実施報告書』
- ・バトラー後藤裕子（2015）『英語学習は早いほど良いのか』岩波新書